

氏名 堅 山 鎮 雄

学 位 の 種 類 医 学 博 士

学 位 授 与 番 号 乙 第 5 0 8 号

学 位 授 与 の 日 付 昭和47年 9 月 30 日

学 位 授 与 の 要 件 博士の学位論文提出者
(学位規則第5条第2項該当)

学 位 論 文 題 目 頸椎先天異常，特に先天性頸椎癒合症のレ線学的研究

論 文 審 査 委 員 教授 田 中 早 苗 教授 砂 田 輝 武 教授 山 本 道 夫

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

112例の頸椎先天異常についてレ線学的検討を加え，特に先天性頸椎癒合症における隣接する上下椎間板への影響について部位別に検討した。

頸椎先天異常 112例中，癒合椎 102例，潜在性脊椎披裂12(4)例，軸椎歯突起異常 6 例であった。癒合椎で 1 椎間のみの癒合は第 2・第 3 頸椎癒合 45 例と最も多く， 2 椎間以上の癒合を含めると， 60.8%と高率であった。

次いで第 3・4 頸椎癒合 10 例であった。2 椎間以上の癒合は 19 例で， 4 例の Klippel-Feil 症候群を含む。

後頭骨・環椎癒合単独例 9 例を除いた 93 例の先天性頸椎癒合症のうち隣接する上下椎間板に変化をみたものは約半数であった。

第 2・3，第 3・4，第 4・5 頸椎癒合ではそれぞれ隣接する下位椎間板に高率に退行性諸変化を認めた。第 5・6 頸椎癒合では隣接する上・下椎間板にほぼ同程度の変化をみた。第 6・7 頸椎癒合では第 5・6 椎間に高度の退行性諸変化を認めた。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は，先天性頸椎癒合症のレ線学的研究で，頸椎癒合症の際に生じてくる隣接上下椎間板のいろいろの変化を系統的に検索し，いくつかの新知見を得，その治癒法に一つの指針を示したすぐれた研究である。

よって，本研究者は，医学博士の学位を得る資格があると認める。